第 189 回　アメリカとソ連の動揺

1　超大国アメリカの動揺

・ベトナム戦争の失敗で苦境におちいったアメリカは、外交政策の転換を迫られた。
・また深刻な財政赤字を抱え、アメリカの国際的地位も低下していった。

ニクソン
第 37 代大統領。アメリカ史上唯一、任期途中で辞任した大統領であるが、外交政策などの評価は非常に高い。

◆（　　）（共和党）（在任 1969～1974 年）

・1969 年、（　　）が人類史上初の月面着陸に成功した。
・1971 年、アメリカ大統領ニクソンは、金とドルの交換停止を発表した。
→ドルの信用が下がり世界的な経済混乱が起こった。
※この発表と混乱を（　　）（ニクソン=ショック）という。
→1973 年、（　　）に移行し、ブレトン=ウッズ体制は崩壊した。

・またニクソン=ドクトリンにより、海外の問題へ介入することを控えた。
→沖縄返還協定に基づき、1972 年、（　　）を日本に返還した。
→1973 年には、ベトナム和平協定によりベトナムからも撤退した。

・中ソ対立が激しくなると、アメリカと中国の接近もはかられた。
→1971 年、国連代表権が台湾の中華民国から中華人民共和国にうつった。
→1972 年、（　　）が行われ、米中関係は劇的に改善した。
・この流れを受けて、日本の（　　）首相も、1972 年に訪中した。
→日中共同声明を発表し、（　　）が実現された。
→1978 年には、（　　）が結ばれた。

ユダヤ系の国際政治学者で、ニクソンの大統領補佐官として、ニクソン訪中を実現させた。後に国務長官。まだ元気で活動中。
キッシンジャー大統領補佐官

握手する毛沢東（左）とニクソン（右）。ニクソン訪中のニュースは、世界を驚かせた。その後 1979 年、アメリカと中国の間に国交が開かれた。
ニクソン訪中

田中角栄首相（左）と周恩来首相（右）。中国から上野動物園にパンダが来て、空前のパンダブームとなったのはこの直後のことである。
日中国交正常化

・一方でニクソン時代のアメリカは、ソ連とも良好な関係を保った。
→1972 年、ニクソンはソ連のモスクワを訪れて（　　）と会談し、
（　　）に調印した。
※この時代の米ソの緊張緩和を（　　）という。
・1974 年、（　　）により辞任した。

第１次戦略兵器制限交渉に調印した際の写真。英語では SALT Ⅰという。このような略字は一見難しく感じるが、日本語を英語に訳してみればすぐに区別できる。
ブレジネフとニクソン

ウォーターゲート事件は、大統領選挙に関係する盗聴事件で、ニクソンも関わっていた。写真は辞任を表明して、ホワイトハウスを去る時の有名な場面。
ウォーターゲート事件

ニクソンの辞任後、副大統領から昇格したが、成果は残せなかった。
初めて来日したアメリカ大統領なのだが、戦後の大統領で唯一入試に出ない。
フォード大統領

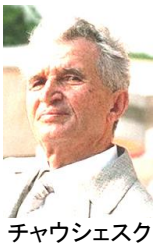
2　ソ連の指導力低下

・ソ連では、1964 年に（　　）されブレジネフが指導者となった。
　→コスイギン首相がブレジネフ第一書記を補佐した。

ブレジネフ
フルシチョフ失脚後に、ソ連の指導者となった。太い眉毛が印象的。晩年にはソ連経済は完全に破綻してしまった。

◆（　　）（書記長在任 1964～1982 年）

・しかしソ連では、経済成長の鈍化や共産党の一党独裁により、徐々に国全体が停滞しはじめた。


チャウシェスク
ルーマニアの独裁者。豪華な生活を送ったが、1989 年の革命で処刑された。

＜東欧諸国の動揺＞

・1965 年以降、（　　）のチャウシェスク大統領は、ソ連と距離を置き独自外交をとるようになった。

・1968 年、（　　）の（　　）は、「　　」と呼ばれる民主化運動を行った。
　→ソ連はブレジネフ=ドクトリンをとなえて、ワルシャワ条約機構軍を侵攻させる軍事介入を行った（チェコ事件）。

・1980 年、（　　）では、ポーランド自主管理労組「　　」の（　　）議長が、民主化運動を行った。

チェコスロヴァキアのドプチェク

ソ連の戦車と民衆

ドプチェクは、「人間の顔をした社会主義」をかかげ、「プラハの春」をすすめた。ソ連の介入に対して、市民はソ連兵の説得などを行ったが、結局ドプチェクは失脚させられた。

「連帯」のワレサ議長

共産主義政権が倒された後、1990 年からポーランド大統領となった。元は電気技師。日本が好きで、政治家を引退した現在もよく来日している。

＜中国・アメリカとの関係＞

・フルシチョフの時代に始まる中ソ対立は、この時代さらに激化した。
　→中国側についた（　　）は、1961 年にソ連と断交した。
　→1969 年、ウスリー川のダマンスキー島で（　　）が発生した。

・アメリカとは良好な関係を保ち、（　　）大統領がモスクワを訪問した。
　→1972 年、第 1 次戦略兵器制限交渉（SALT Ⅰ）に調印した。

・1979 年には、第 2 次戦略兵器制限交渉（SALTⅡ）に調印した。
　→しかし 1979 年にソ連が（　　）に侵攻したため、米ソ関係は急激に悪化し、「　　」と呼ばれる対立となった。

アフガニスタン侵攻

共産主義勢力を支援するため、ソ連はアフガニスタンに侵攻した。ターリバーンの登場など、現在の世界に大きな禍根を残した。

サハロフ

ソ連の物理学者で、「ソ連水爆の父」と呼ばれた。しかし後に核実験の停止や民主化を求めて活動するようになり、ノーベル平和賞を受賞した。ブレジネフによって監禁状態に置かれた。

カーター大統領

第 39 代大統領。民主党から出馬して当選したが、指導力を発揮したとは言い難い。ソ連によるアフガニスタン侵攻の際のアメリカ大統領。